メッセージアウトライン
マタイの福音書5：14～16
「あなたがたは世の光です」

[14-16]「あなたがたは世の光です。山の上にある町は隠れることができません。また、明かりをともして升の下に置いたりはしません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいるすべての人を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです」

イエスは弟子たちとともに山に登り、彼を取り巻く多くの群衆を前にして語っておられる。 しかし、特に語っておられる対象は弟子たちであろう。→5:1~2 ペテロやアンデレ、ヤコブやヨハネはガリラヤの漁師であり、マタイは取税人であり、シモンはローマを武力で倒そうとする熱心党という過激な組織の党員であった。→10:2~4 他の弟子たちも含めて彼らは特別に選りすぐられたエリートではなく、ごくごくどこにでもいるような種々雑多な一般人であったのである。違うのは、彼らがイエスを世の救い主と信じる信仰を持った者たちであったということである。そして同様に今、イエスをキリストすなわち自分を罪から救ってくださる救い主と信じる私たちもイエスの弟子であり、イエスの語っておられる「あなたがた」のうちに含まれるのである。ペテロやヨハネとともにあなたもその場にいてイエスの話を聞いていると思っていただきたい。そしてイエスはそのような者たちは「世の光です」と言われる。これは非常に大きな意味を持つ。すなわち信仰者はごくごく普通のどこにでもいるような者たちであるが、その者たちはこの世において光の役割を果たす者だというのである。光は暗闇を照らす。右も左も前も後ろも分からない、どのように進み、どのように生きるべきか、どのように死と滅びと罪に打ち勝つべきか迷っている人々を照らし、歩むべき道を示す役割を与えられている者なのである。しかし、なぜイエス・キリストを信じる信仰者が世の光なのか。それは本家本元の世の光であるイエス・キリストに従っているからなのである。

→ヨハネ8:12「イエスは再び人々に言われた。『わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。』」

イエスは罪に汚れたこの暗闇の世界に光、つまり罪と死と滅びからの救いをもたらすために父なる神のもとから来られた救い主である。→ヨハネ3:16

イエスがガリラヤで福音を宣べ伝え始められた時に預言者イザヤのことばが成就

した。→マタイ4:14~17「……異邦人のガリラヤ。闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰に住んでいた者たちの上に光が昇る。この時からイエスは宣教を開始し、『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから』と言われた」
イエスこそまことの世の光である。そしてその世の光を受け、信じ従う信仰者も世の光としての役割をこの世で果たすことができるのである。
自分の罪を認め、それを告白し、イエス・キリストが十字架上で自分の罪の身代わりとなり、罪と死と滅びより贖ってくださったと信じ受け入れるならば誰でも神の子とされ、世の光となり、喜びをもってイエス・キリストによる救いの福音を宣べ伝える者となれるのである。これはクリスチャンの特権である。イエスは今、山の上で弟子たちに語っておられるが、「山の上にある町は隠れることができません」とは聞く者たちにとって当然のこととして理解できたことであろう。イエスはこのような実物教育をもって人々に理解しやすいように教えられるのである。さらにイエスは15節で「明かりをともして、升の下に置いたりはしません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいるすべての人を照らします」と明かりは人を照らすために升の下ではなく、燭台の上に置かれると言われる。これも当然のことである。升は普通木製四角形の箱型で液体や粉、粒などの分量を量る器。
そのように明かりが燭台の上や、障害物のない所に置かれるとき、周りの人々を照らすことができるのである。
13節でイエス・キリストを信じる者は「地の塩」であると教えられたが、それはこの世にあってクリスチャンがどのような存在であるのかを教えた。そして「地の塩」と重なる面もあるが、今教えられている「世の光」とはこの世にあって私たちがどのような役割を果たすのかということを教えている。それは闇の中にあったものを照らし、明るみに出し、罪と悲惨と死の暗闇の中に迷い、倒れ、座り込んでいる人々にその現実を示し、神の愛、神の救いの道を示すという役割である。
　21世紀に入り、その四分の一の年数を満たそうとしているこの現在においても、ここに至るまであらゆる知識が蓄えられ、社会は進歩し、環境は改善され、人の踏み行うべき道が道徳教育などによって教えられてきた。世を眺めてみると善人、偉人、賢人、そして目立たないが人に迷惑をかけず、世のため、人のために骨身を惜しまず労している多くの人々もいる。しかし、依然として人間の心の中には罪性が存在し、真の神に向かわず、的外れな道に進ませるのである。「悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない」

とイエスは言われる。→ヨハネ3:20

使徒パウロは告白する。「私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。そういうわけで、善を行いたいと願っている私に悪が存在するという原理を、私は見出します」→ローマ7:18~21

人々は何が正しいかを知りながら善ではなく悪の方に行く。創造主なる神はこの世界をすばらしく創造されたが神によって創造された最初の人間アダムとエバが神に逆らい、罪を犯して以来、その子孫である全人類は罪の性質を持つ者となり、死すべき者、滅びに行く者となり、この世界は呪われたものとなってしまった。→創世記3章

しかし、そのような世界を神は見捨てず、かえって愛をもって臨んでくださり、人間の罪を贖い救うために神はそのひとり子イエスをこの世に送ってくださったのである。神の御子イエスは人となってこの世に来てくださり、私たちに救いの道を開いてくださったのであった。だれでもこのイエスを自分の救い主として信じ受け入れ、従う者は罪と死と滅びから救われ、きよめられ、神の子とされ、世の光としての役割を与えられる。それは16節で言われているように「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです」との役割である。では「良い行い」とは何か。それはイエス・キリストを信じ従うことによってこの世に神の救いを指し示す生き方であり、日々の生活において信じる者に与えられている御霊の実を結ぶ生き方である。→ガラテヤ5:22~26「御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。私たちは、御霊によって生きているのなら、御霊によって進もうではありませんか。うぬぼれて、互いに憎み合ったり、ねたみ合ったりしないようにしましょう」

私たちが神を愛したからではない。神が私たちを愛し、アダム以来の罪の罰である死と滅びに行かないように御子イエス・キリストをこの世に送ってくださった。

イエス・キリストを信じる者に与えられている役割はこの暗き世に光を輝かせ、そ

れによって世の人々が天におられる父なる神をあがめるようになるという光栄な働きであり、責任ある働きである。私たち信仰者は日々の生き方において私たちの救い主イエス・キリストにより頼み、御霊の実を結び、世を照らす光として良き生き方に励む者となっていかなければならない。